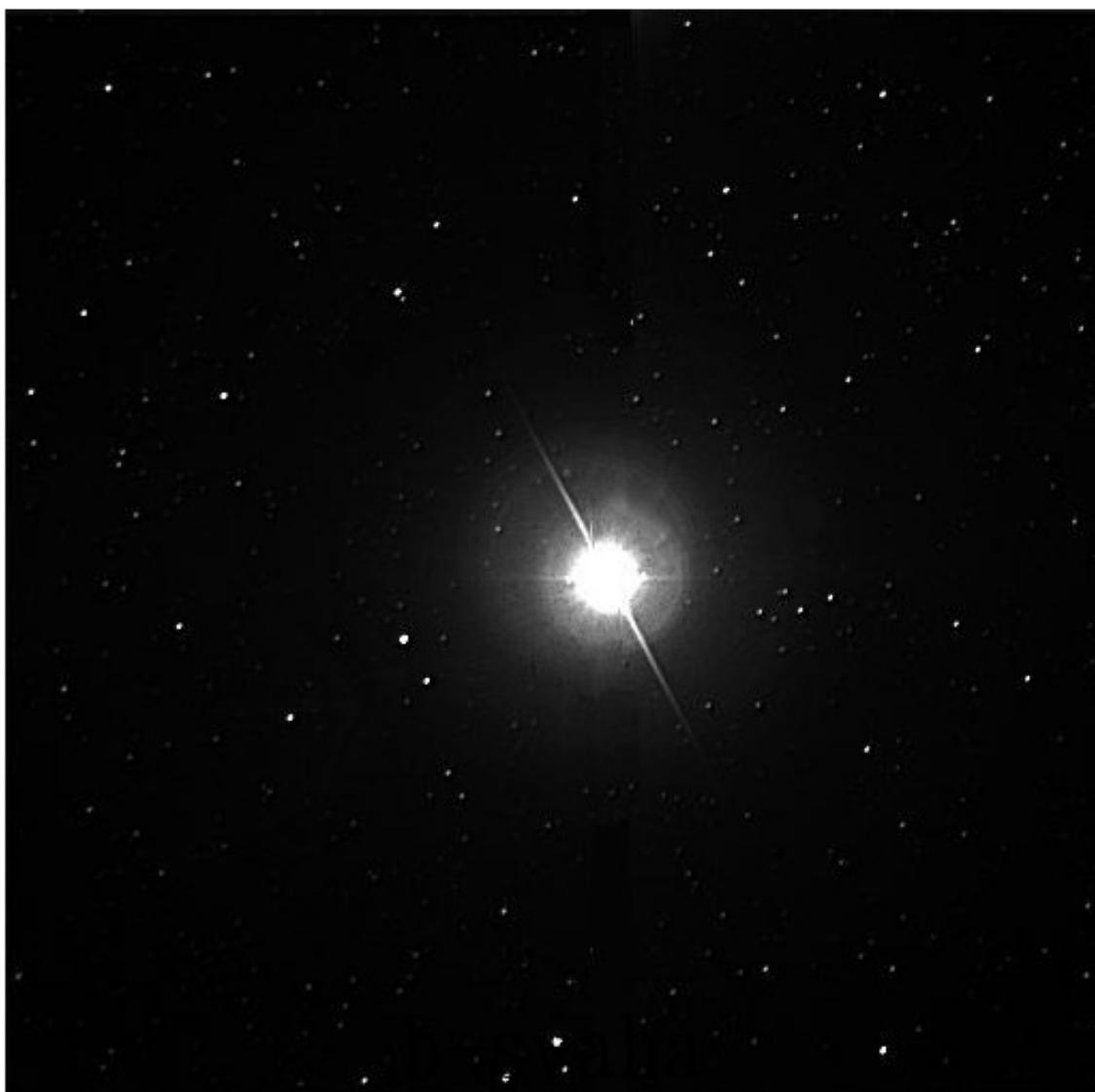


【14-07-06】 ブルー・アル
タイルを一杯



また、ベガでもアルマイルでも、お米を食べるときは、外皮を削っただけの玄米を使用し、白米にはしないそうだ。完全食としての米の栄養バランスが失われてしまうからだという。

彼らから見ると、地球で慣習化している、食品に対する過剰な精製方法は、自然の摂理を無視した、大変無駄で不健康な栄養概念に基づくものなのだという。たとえば、白砂糖、精製塩、白米、白い小麦類などが、そうした過剰精製方法で製造されているということだ。

リラには、『光の花弁』と呼ばれる、薔薇の大輪を針のないサボテンに変えたような一皿が置かれた。

薄緑色で肉厚の花びら一枚一枚が、さまざまな淡い色に光るこの食べ物は、胃で消化されたのち光に転化し、すべて吸収され、残存物は一切生み出さない植物なのだという。

リラにもらって一口食べてみると、油のよく乗った中トロのような、質感のある美味だった。

ルアは、三種類のライ麦の全粒粉を使って焼き上げたパンに、香り、風味ともにメープルシロップによく似た樹液をかけたものを二枚食べた。

小麦に比べ、比較的劣悪な環境においても栽培可能なこの植物を地球にもたらしたのは、ルアと鷲座の仲間たちなのだという。以来、地球にいてもどこにいても、ライ麦パンはルアのお気に入りの朝食なのだそうだ。

ライ麦には、整腸作用があるらしい。腸内の善玉菌を増やし、コレステロールや糖質、有害物質が体内に取り込まれるのを妨げる働きがあり、癌、糖尿病、成人病の予防に有用であることから、日本人は、朝食やランチのサンドイッチなどに、ライ麦パンをもっと取り入れたらいいということだった。

こうして、アルマイルやベガの食べ物を味わい、それらの由来に関する話を聞いているうちに、アルマイル人の健康や医療の現状はどうなっているのだろう、という単純な疑問が湧いてきた。

私は、昨日ルアに紹介してもらった、医療班のリーダーであるポニー・Cの半身半馬の姿を思い浮かべていた。

彼は射手座出身の、ケンタウロス族はケイロンを祖先にもつ医師であり、ヒーラーだ。

ゆったりとした朝食が終わるころ、私はルアに、医療班を訪ねることを提案した。ルアはポニー・Cのスケジュールを確認すると快諾し、私たち三人を医療班へと向かう回廊へといざなった。

回廊を歩き終えて医療班のエントランス・ルームに入ると、メンバーの一人が私たちを待っていた。

ここは、私が昨日、ポニー・Cに紹介された部屋だ。

ルアはメンバーの一人と少しの会話をしたのち、私たちを彼に託し、リーダー業務に戻って行った。

私たちは、彼とともに、数メートル先にある医療班の部屋へ向かった。

入り口に立った私は、思わず息をのんだ。

そこは、部屋という名称がまったくふさわしくない、広さが数十キロにも及ぶような自然空間だったのだ。

エメラルド色の内海、白砂のビーチもあれば、緑の丘や深い森も滝もあり、大理石でできたサナトリウム風の建物やジムナスティック・パーク、ロッジやキャンプ場のような施設まで点在していた。

私たちは、入り口近くの庭園へと向かい、透明な瑠璃色の薔薇のアーチをくぐった。

そこには、白と緑の花ばかりを集めた花壇が、高く吹き上げる噴水を静かに取り囲んでいた。

ポニー・Cは、そこで私たちの到着を待っていてくれた。

「わが友、アル、みどり、リラ、医療班へようこそ！」

燦々と舞う噴水のオーラを、褐色の艶やかな体毛に纏わせるようにして立っていた彼は、私たちを見つけると満面の笑みを浮かべ私の手を握った。

「話はルアから聞いています。私たちアルマイル人が考える健康とは、医療とはどのようなものか、今日は体験的に知っていただきたいと思います。」

アル、室内ツアーを始めるに当たり、何かリクエストやご質問はありませんか？」

思わぬ環境の変化に、私の頭脳はまだ追いつくことができず、リクエストまでは思い付かなかったが、直径数十メートルとみていた宇宙船内部の、この部屋の法外な広さに関しては、どうしてそれが可能なのかを知りたいと思った。

「わかりました。では、最初の訪問地への道すがら、そのことについてお話ししましょう」

そう言うと、ポニー・Cは、前右脚の蹄でコツンと小さく音を立て、私たちはゆっくりと歩き

出した。

噴水と室内太陽が生み出す、新鮮なオゾンに満ちた花壇の余韻を味わいながら歩いていると、ポニー・C が静かに語り出した。

「アル、あなたはこの宇宙船の大きさに比して、医療班の部屋があまりに大きすぎることに疑問を持たれたのですね。

確かに、地球の三次元的物理学思考からすれば、数十メートルの中に数十キロが収容されることは、あり得ない事実でしょう。しかし、対象の大きさは、常に、比較する側の大きさによって左右されます。主体である、見る側の大きさが変われば、小さなアリも巨大な恐竜のように見えるでしょう。

つまり、この部屋の中に存在する一切は、万分の一単位に縮小されているのです。入室の際、私たちの体もすべてそれに合わせ縮小されるのです。ですから、直径数十メートルの宇宙船の一部屋が、この壮大な医療班の部屋であることが、可能なのです。

ここに存在する花々も、道も建造物も、鳥たちも、丘も、海も、相関的比率はそのままに、すべてコンパクトに収められているのです」

まるで、不思議の国に紛れ込んだアリスになったように感じた。

アリスの場合、自分だけが小さくなったのだから、その変化に気づきやすかったのだろうが、もし、すべてが一遍に縮小したら、それが起きたなどとは夢にも思えなかったはずだ。現に、ポニー・C の説明を聞いた今でも、私にはにわかには信じられない話だった。

庭園の裏口にある藤棚のトンネルを抜けると、白い土でできた小道が、うねるようにしてなだらかな丘の先へと消えていた。その頂上には、サナトリウムらしい、白い建物が見える。

道の左手には、ログハウス風のロッジや白樺のような樹皮の木材で作られたコテージが、さまざまな広葉樹の緑の葉蔭に点在している。右手はキャンプ場らしく、地球のものとよく似たキャンバス製のテントが、丘のなだらかなスロープのところどころに散在している。

この美しい空と大地、自然と完全に調和した道や施設の平和な風景は、私の心を知らないうちに開いてくれたようだ。さっきまでの疑問など、もはやどうでもよいことに思われた。

間もなく、私たちは、最初の訪問地である白樺風コテージの一つに着いた。

私たちの到着を知ったのだろう、ひと組の老夫婦が、家の外に出て迎えてくれた。

ポニー・C は、私たち三人を彼らに紹介し、私たちはコテージのドアをくぐった。

コテージの住人、アキーラとライラ

ドアを開くと、そこは15畳くらいのリビングキッチンだった。

部屋は長方形で、奥は、ラックを隔て、キッチンになっていた。

入り口から見て左手中ほどに廊下があり、その両側にベッドルームが一つずつ、小さな収納室が一つとバスルームがあった。

内装は、落ち着いた色のウッドカラーを基調として、オーク、樺、ヒノキ、桐など、さまざまな木材が、硬軟、色合いなどに合わせ、それぞれの材質にふさわしい場所に使われていた。落ち着いた色合いと木の香りの中に、若々しさを感じさせる明るさが、絶妙なブレンドをみせていた。

私たちは、一本の樺がそのまま一つの支柱となった大きなテーブルの椅子に座り、アールグレイのような香りのするお茶をいただいた。

「わたしたちは、もうここに、四十年ほど住んでいます。

地球の時間軸で言えば、五百年くらいでしょうか。

二人とも、この場所が大変気に入りまして、終の棲家にすることに決めたのです」

白ひげがどことなく仙人、賢者を思わせる男性は、紅茶を一口すするとそう言った。

名をアキーラと言った。

「もっとも、最初は、ほんのお遊び、医療班の部屋を体験するために、星からやってきたのでございますよ。

ところが、いざ住んでみたら、こんなに住み易くて生きがいを感じられる素晴らしい世界は、なかなか他には見つけられない、ということになりました...

気が付いたら、ここの世界の案内人のような二人になっておりましたの。おっほほっ...」

ライラという名のご婦人が、嬉しそうにそう繋いだ。

「このお二人の言われる通り、彼らは、もう永いことここの住人として、同時にさまざまな星の世界から訪れる人たちの、よきガイドとして暮らしておられるのです。

この医療班の部屋を訪問する人が最初に訪れる場所、それがこのお二人のロッジなのです。わたしの中では、いつの間にか、そのようになっていました。

お二人に会って話をすることが、わがアルタイルでの医療、健康について知るための、一番わかりやすい方法だと思ったのです」

椅子の要らないポニー・Cは、立ったままそう言うと、手に持ったカップからくゆり立つベルガモットの芳しい香りを、深々と胸に吸い込んだ。

【2014-07-06】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/87456>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87456>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87456>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ